

平成22年4月30日現在

研究種目：特定領域研究
 研究期間：平成17年度～平成21年度
 課題番号：17083031
 研究課題名（和文） 寧波地域における日明交流の総合的研究
 —遣明使の入明記の総合的分析を通して—
 研究課題名（英文） Comprehensive Study of Japan-China (Ming) Relation in the Ningbo Area -through Comprehensive Analysis of the Diaries Written by the Missions to Ming-
 研究代表者
 伊藤 幸司 (ITO KOJI)
 山口県立大学・国際文化学部・准教授
 研究者番号：30364128

研究成果の概要（和文）：

本研究では、特に15～16世紀段階の日本・日本人が寧波を通じて大陸文化の何を摂取し、しなかったのか、また彼らが寧波およびその周辺地域で具体的にどのような活動を行ったのかという点について、主に文献史料に依拠しつつ、寧波およびその周辺地域（関連地域も含む）のフィールドワークの成果を含み込みながら考察を行った。

研究成果の概要（英文）：

This research considers the aspects of continental culture Japan adopted via its contact with the Ningpo region from the 15th century to the 16th century. It also describes the type of activities the Japanese undertook in Ningbo and the surrounding areas. Additionally, the research considers the results of fieldwork based on historical documents of the period and conducted in the Ningbo region.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	4,200,000	0	4,200,000
2006年度	4,200,000	0	4,200,000
2007年度	4,200,000	0	4,200,000
2008年度	4,200,000	0	4,200,000
2009年度	4,200,000	0	4,200,000
総計	21,000,000	0	21,000,000

研究分野：

科研費の分科・細目：特定領域

キーワード：寧波・遣明船・入明記・東アジア海域・大運河・港町・禅僧

1. 研究開始当初の背景

前近代の東アジアにおいて、寧波は代表的な国際交流・文化交流の基点であった。特に、日本最大の国際港湾都市・博多と寧波とを結ぶ航路は、日本の文化形成において決定的な影響力を持ったと言っても過言ではない。寧波における日明交流については、戦前以来、一定度の研究の蓄積があるものの、現在飛躍的に研究水準が進む日朝・日琉交流の実態と比べると、その停滞感は否めない。その原因は、日明交流史料の丹念な分析が多面的に行われていないこと、主に中国側に眠る関連史資料の発掘が精力的に行われていないことに起因する。本研究では、このような状況を打開するために、近接分野で活発に展開している日朝・日琉交流の分析手法に学びつつ、日明交流の実態を寧波をフィールドとして本格的にかつ総合的に研究することで、東アジア交流史における日明交流の研究水準の引き上げを狙う。

2. 研究の目的

本研究では、特に15～16世紀段階の日本・日本人が寧波及びその周辺地域で具体的にどのような活動を行ったのかという点について、主に文献史料に依拠しつつ、寧波およびその周辺地域のフィールドワークの成果を含み込みながら考察を行う。検討対象とする主要な文献史料は入明記とする。その際、美術史・宗教史・考古学など他分野の研究者、中国・韓国など諸外国の研究者との交流を重視し、複合的・間文化的な視点から「寧波地域における日明交流の総合的研究」に関する基礎的な事柄を把握することに努める。

3. 研究の方法

本研究における研究方法は以下の5点である。

(1) 策彦周良『初渡集』中巻の輪読
定期的に輪読会を開催し、『初渡集』中巻の校訂本を作成する。

(2) 現地踏査
各種入明記（笑雲瑞訢『入唐記』、策彦周良『初渡集』『再渡集』など）に記載される現地情報を確認するために、日本及び中国における遣明船関係の現地踏査を行う。

(3) 史料原本調査
日明関係という外交を考察する上で不可欠な、史料の原本調査を実施する。

(4) シンポジウムなどの開催
本研究の成果を適宜シンポジウムや学会などの場で発表し、リアルタイムに成果を還元することに努力する。

(5) 東アジア海域研究会の実施
海域交流研究を志向する他班と協力し、前近代の東アジア海域の歴史像を構築する。そのために、東アジア海域研究会を発足させ、適宜、研究会を開催する。

4. 研究成果

本研究の成果は以下の通りである。

【策彦周良『初渡集』中巻の校訂本作成】

本研究の根幹とも言うべき作業が、入明記の詳細な分析である。各種ある入明記のなかでも本研究が考察の素材としたのは、第18次遣明船の副使を勤めた京都天龍寺妙智院ゆかりの策彦周良の『初渡集』である。当該史料は、各種入明記のなかで最も詳細な情報

を有しているものの、従来、その本格的な考察は50年前に発表された牧田諦亮『策彦入明記の研究』下巻（法蔵館、1959年）で停滞していた。さらに、学界で共有されている『初渡集』の刊本は『大日本仏教全書』遊方伝叢書4や牧田諦亮編『策彦入明記の研究』（法蔵館、1955年）であるが、いずれも原本と校合すると様々な問題点を含んでいた。以上の現状を鑑み、本研究では5年という限定された研究期間を考慮した上で、長大な『初渡集』のなかでも寧波滞在時の記録を記す中巻を取り上げ、信頼に足る校訂本の作成を行った。

校訂作業は、妙智院所蔵『初渡集』中巻の原本を底本に定め、適宜、仏教全書本や牧田本も参照しつつ、年に数回の輪読会を開催した。輪読会では、現地踏査と連動する都合上、まず意味を取りつつ中巻全体を読解した。次に、再度、レジュメを作成しつつ文字の確定作業を行うという二段構えで行った。校訂本は、将来、テキストデータとして公開することも視野に入れつつ、特に凡例の作成に留意しつつ進化した。現在、校訂本の草稿が完成し、刊行予定の論文集に掲載することを考えている。

【現地踏査】

本研究では、単なる史料を読解するという座学に終始せず、歴史的な景観情報をも加味することで、日明交流史の忠実な解釈を試みた。特に、入明記の主要な舞台となっている浙江省や江蘇省といった中国江南地域は、近年、開発の波が凄まじく、急速に歴史的景観が失われつつある。本研究による現地踏査は、こうした失われつつある現地情報を保存し、後世に残していくという意図も含んでいる。この5年間で踏査した主要な地域は以下の通りである。

①2005年11月：五島列島・平戸周辺地域の踏査

②2005年12月：台南地域の踏査

③2006年07月：鹿児島硫黄島の踏査

④2006年08月：寧波・舟山列島の踏査

⑤2007年08月：雲南・南京の踏査

⑥2008年07月：杭州の踏査

⑦2008年08月：江蘇省大運河の踏査

⑧2009年08月：浙江省の大運河および仏教聖地（天台山・天目山）の踏査

①・④・⑤（南京）・⑥・⑦・⑧（大運河）の踏査は、入明記に登場する地名・寺院・港・名所旧蹟などを逐一確認しつつ実施した。踏査に際しては、事前準備として関係の地誌や古地図（特に中華民国時代に作成された地図が至便）を確保し、史料とのつき合わせ作業を行った。中国大陸では、大運河沿線と旧城内における踏査を丁寧に行くことによって、歴史的景観情報を吸収することが可能となった。①や④の海上移動では航路を意識しつつ、船舶での移動中は常に島の位置やその見え方、海の様子などに気を配りながら踏査の記録を行った。

なお、①の成果は、伊藤幸司「『入唐記』を読む（1）」（『市史研究ふくおか』創刊号、2006年）に反映されている。また、⑤（南京）の成果の一部は、伊藤幸司「南京天界寺の故地」（『市史研究ふくおか』第3号、2008年）や、橋本雄「室町日本の対外観」（『歴史評論』第697号、2008年）などに活かされている。これらは、現地踏査の結果、初期日明交流の重要拠点であった南京の旧天界寺（廃寺）の立地を確定できたことが立論に大きな影響を与えている。特に、報告書に添付済みの橋本論文は、足利義満の冊封の受封儀礼に注目しつつ「場」の政治性に注目している。

②では、16～17世紀の東アジアの海域世界に大きな影響を与えた台湾のオランダ勢力関係史蹟の踏査を行うことで、その時代のイメージを構築することができた。③は、遣明

船の主要輸出品であった硫黄の産出地硫黄島を踏査することで、海域世界における要所としての島の意味を考えることが可能となった。その成果の一部は、大庭康時ほか編『中世都市・博多を掘る』（海鳥社、2008年）の誌面に活かされている。⑤（雲南）では、明朝の政策によって雲南地域に移送された日本僧関連の史蹟を確認できたことで、従来、等閑視されてきた政治事件を浮き彫りにすることができた。この成果は、伊藤幸司「日明交流と雲南—初期入明僧の雲南移送事件と流転する「虎丘十詠」—」（『仏教史学研究』第52巻第1号）として公表した。⑧（天台山・天目山）では、中世日本の僧侶が憧れ、日本仏教界にも大きな影響力を誇った聖地を巡見することで、詩文に読まれた歴史的景観を追体験することができた。これらは語録史料の解釈の上で非常に有効であった。

以上の現地踏査自体の成果は、近いうちに踏査日記と共に写真付きでweb上に公開していく予定としている。

【史料原本調査】

本研究では、日明交流の実態を追究する上で欠かすことができない注目史料の原本調査を行った。具体的には、台湾・中央研究院に所蔵される日朝外交文書と清代の勘合、大阪歴史博物館に所蔵される「豊臣秀吉宛誥命」を対象とした。これらの成果は、伊藤幸司「東アジアを流転した対馬藩主宗義成の外交文書」（『東風西声』第2号、2006年）、橋本雄「日明勘合再考」（九州史学研究会編『境界からみた内と外』岩田書院、2008年）として公表されている。

【シンポジウム・研究会の開催および報告】

本研究では、以下のような研究会を共催し、また適宜、研究報告を行った。

①ワークショップ「火器技術から見た海域アジア史」（2006年1月）寧博班・朝鮮班と共

催

②文化交流部門国際シンポジウム「寧波の美術を海域交流から考える」（2006年12月）伊藤幸司「日明交流と肖像画賛」

→『寧波の美術と海域交流』（中国書店、2009年）に掲載。報告書に添付済みの伊藤論文は、遣明船で海を渡った禅僧の肖像画の賛者に注目しつつ、日本禅林の文人化という流れを論じている。

③文献資料研究部門・総括班共催シンポジウム「文献資料からみた東アジア海域文化交流（2008年1月）」伊藤幸司「入明僧からみた日明交流」→予稿集に論文掲載。

④中国社会文化学会国際シンポジウム「禅と東アジア」（2008年7月）伊藤幸司「禅僧と外交」→「外交と禅僧」（『中国—社会と文化—』第24号、2009年）に掲載。

⑤東アジア海域研究会→後述。

【東アジア海域研究会の実施】

本研究では、東アジア海域の理論化を行う過程で、研究代表者・分担者・協力者のほぼ全てが東アジア海域研究会に参加した。当該研究会において、日明班のメンバーは、16世紀を中心とした東アジアの海域世界像を描き出すべく、10数回を数える世話人会・研究会を重ねた。その結果、討議の上まとめた素稿を2008年11月に巖島で開催されたシンポジウムの場において、伊藤が「せめぎあう海：1500—1600」として報告を行った。なお、この成果は「ひらかれた海：1250—1350」「すみわける海：1700—1800」とともに近刊予定となっている。

【市民への研究成果の還元】

本研究の一環として、日明関係にかかわる学術的成果を市民に還元する目的で、大内氏歴史文化研究会と共催で2007年3月に山口県立山口図書館で講演会を行った。川添昭二氏（九州大学名誉教授）を招聘して行われた

講演会では、「大内政弘における政治と文化」と題し、遣明船にも大きな影響力を及ぼした周防の大名大内政弘の政治と文化の関連性について、特に文学史料に注目しながら話が展開された。講演会は、多くの市民の方々に参加していただくことができ、概ね好評との評価を頂くことができた。

【論文集の刊行】

以上の5年間にわたる本研究の活動成果の多くは、同じ寧波プロジェクトにたずさわる寧博班と合同で汲古書院から刊行予定の論文集に掲載予定となっている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計32件)

- ①伊藤幸司、硫黄使節考、査読無、アジア遊学、132、2010、pp154-172
- ②伊藤幸司、日明交流と雲南、査読有、仏教史学研究、52-1、2009、pp26-47
- ③伊藤幸司、外交と禅僧、査読無、中国一社会と文化一、24、2009、pp41-70
- ④伊藤幸司、日明交流と肖像画賛、査読無、人歩の美術と海域交流、中国書店、2009、pp125-147
- ⑤伊藤幸司、書評と紹介・橋本雄著『中世日本の国際関係』、査読無、日本歴史、727、2008、pp114-116
- ⑥伊藤幸司、日明・日朝・日琉貿易、査読無、中世都市博多を掘る、海鳥社、2008、pp82-97
- ⑦伊藤幸司、博多の寺社、査読無、中世都市博多を掘る、海鳥社、2008、pp224-233
- ⑧伊藤幸司、日明の外交と貿易、査読無、海域アジア史研究入門、岩波書店、2008、pp68-74
- ⑨ITO Koji, Japan and Ryukyu during the Fifteenth and Sixteenth Centuries、査読無、ACTA ASIATICA、95、2008、pp79-99
- ⑩伊藤幸司、東アジアを流転した対馬藩主宗義成の外交文書、査読無、東風西声、2、2006、pp27-35
- ⑪伊藤幸司、一五・一六世紀の日本と琉球、査読有、九州史学、144、2006、pp4-24
- ⑫伊藤幸司、笑雲瑞訢『入唐記』を読む(一)、査読無、市史研究ふくおか、創刊号、2006、pp83-96
- ⑬伊藤幸司、史料紹介・妙智院所蔵「天文十二年後渡唐方進貢物諸色注文」、査読無、市史研究ふくおか、創刊号、pp97-104
- ⑭伊藤幸司、中世日本の港町と禅宗の展開、査読無、港町に生きる、青木書店、2006、pp237-266
- ⑮橋本雄、皇帝へのあこがれ、査読無、アジア遊学、122、2009、pp184-199
- ⑯橋本雄、再論、十年一貢制、査読有、日本史研究、568、2009、pp27-40
- ⑰橋本雄、日明勘合再考、査読無、境界からみた内と外、岩田書院、2008、pp327-362
- ⑱橋本雄、室町日本の対外観、査読有、歴史評論、697、2008、pp53-69
- ⑲橋本雄、史料・文献紹介『善隣国宝記』、査読無、歴史と地理、617、2008、pp24-31
- ⑳橋本雄・米谷均、倭寇論のゆくえ、査読無、海域アジア史研究入門、岩波書店、2008、pp80-89
- ㉑橋本雄、室町政権と東アジア、査読有、日本史研究、536、2007、pp19-40
- ㉒橋本雄、中国の師から日本の弟子へ、査読無、東声西風、3、2007、pp30-41
- ㉓橋本雄、『海東諸国紀』に見える「来朝」、査読有、日本歴史、704、2007、pp66-67
- ㉔須田牧子、遣明使節の旅路、査読無、証券奨学財団同友会報、35、2009、pp37-42
- ㉕須田牧子、橋本報告を聞いて、査読無、歴史評論、697、2008、pp96-99
- ㉖須田牧子、朝鮮通信使と安徳天皇、査読無、平家物語を読む、吉川弘文館、2009、

pp176-178

②⑦OKAMOTO Hiromichi、Foreign Policy and Maritime Trade in the Early Ming Period、査読無、ACTA ASIATICA、95、2008、pp35-55

②⑧西尾賢隆、機山信玄と禅宗関山派、査読有、日本歴史、726、2008、pp100-110

②⑨西尾賢隆、蘭溪道隆の法語、査読無、禅学研究、86、2008、pp54-77

③⑩西尾賢隆、東隆寺蔵諸山疏、査読無、禅文化研究所紀要、28、2006、pp143-164

③⑪西尾賢隆、来々禅子言異茶榜、査読有、日本歴史、697、2006、pp67-73

③⑫米谷均、朝鮮侵略後における被虜人の本国送還について、壬辰戦争、明石書店、2008、pp104-128

〔図書〕(計3件)

①北島万次・村井章介・孫承喆・橋本雄、日朝交流と相克の歴史、校倉書房、2009、pp1-398

②岡本弘道、琉球王国海上交渉史研究、榕樹書林、2010、pp1-255

③西尾賢隆、中国近世における国家と禅宗、思文閣出版、2006、pp1-398

〔学会発表〕(計7件)

①伊藤幸司、日明交流と雲南、浙江工商大学日本文化研究所国際シンポジウム東アジア文化交流—人物往来、2008/7/27、杭州湾大酒店(中国・杭州市)

②伊藤幸司、禅僧と外交、中国社会文化学会、2008/7/6、東京大学

③橋本雄、中世日本の国際交流と大蔵経、寧波プロジェクト仏道交渉班主催シンポジウム、2009/9/1、東京大学

④橋本雄、室町日本の対外観、第41回歴史科学協議会大会、2007/11/18、早稲田大学

⑤橋本雄、室町政権と東アジア、2006年度日

本史研究会大会、2006/10/28、京都大学

⑥岡本弘道、朝貢ルートの観点から見た琉球の対明朝貢の意義、第12回中琉歴史関係国際学術会議、2009/11/22、中国海洋大学(中国・青島市)

⑦岡本弘道、冊封と勘合貿易、大阪大学歴史教育研究会第23回例会、2008/4/19、大阪大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 幸司 (ITO KOJI)

山口県立大学・国際文化学部・准教授

研究者番号：30364128

(2) 研究分担者

橋本 雄 (HASHIMOTO YU)

北海道大学大学院・文学研究科・准教授

研究者番号：50416559

(3) 研究分担者

須田 牧子 (SUDA MAKIKO)

東京大学・史料編纂所・助教

研究者番号：60431798

(4) 研究分担者

岡本 弘道 (OKAMOTO HIROMICHI)

関西大学・文化交渉学教育拠点・PD

研究者番号：70469237

(5) 連携研究者

西尾 賢隆 (NISHIO KENRYU)

花園大学・文学部・特任教授

研究者番号：50066346

(6) 研究協力者

米谷 均 (YONETANI HITOSHI)

共立女子大学・非常勤講師